

カントは現象主義者だったか？

稲垣 恵 一

1

現象主義は哲学史的にはバークリの認識説にさかのぼることができる。現象主義と一言に言っても様々なタイプの現象主義があるが、現象主義は一九三〇年代から始まる論理実証主義運動と結びつき、多くの支持を集めたと言われている。そして、そうした哲学潮流の中でまた、カントの理論哲学も現象主義的に解されてきた。

例えば、『純粹理性批判』を分析哲学の立場から再構成したストローソンは、『意味の限界』という著作の中で、カントの理論哲学を現象主義と見なすいくつかの主張をしている。また、一九七〇年代にアリソンは「カントの先験的対象の概念」という小論を著しているが、その中でカントの先験的観念論をロック流の伝統的な観念論が孕む諸問題を解決する新たな観念論と見なしている。ロック流の伝統的な観念論とは、われわれは観念のみに到達できるのであって、観念の生成論的原因である物体（ロックの言葉を使えば「実体」になるが）に到達することはできないという観念論である。この伝統的な観念論が、物体の不可知論へ至るのは容易であり、カントもこの問題に真正面から取り組んだ、というのがアリソンの先験的観念論解釈の要なのである。そして、アリソンはロック流の伝統的観念論とカントの先験的観念論と間に断絶を認めず、ある種の連続性を認めている。⁽²⁾ その限りにおいて、アリソンはカントの先験的観念論を現象主義であると面だつて主張してはいないが、現象主義的に解釈していると言いうると思われる。

このようにカントの理論哲学の現象主義的解釈は多く存在するが、本当にカントの理論哲学が現象主義という言葉によって括ることができるかどうか、という問いそのものは未だに問われていないと思われる。それ故、カントが現象主義者であったのかどうかを『純粹理性批判』『プロレゴメナ』をもとに検討することが本稿の目的である。

まず、初めに現象主義とはどのような説なのかをエイヤールとストローソンの主張から導く。次に、『純粹理性批判』『プロレゴメナ』において、カントがどのような立場を堅持しているのかを解明する。最後に、カントが現象主義者であるのかどうかを判定して、本稿の結論としたい。

2

現象主義とは、ロッキ的な観念説を克服するために考え出された一つの考え方である。ロッキ流の観念説は、知覚表象説と呼ばれる理論である。知覚表象説とは、知覚の直接的な表象は外的世界にある事物の何らかの触発 (Affektion) の結果であり、それによって獲得された内的表象を通じて外的世界を間接的に認識する、という説である。われわれは知覚という内的表象を持つのみであるから、外的世界にある事物を知ることとはできない。そう考えると、外的世界やそれに属する事物はすべて意味を持たないものになってしまう。こうした考え方を克服するために提起された理論が、現象主義である。現象主義は、ロッキ流の観念説のように物から表象へと因果的に経験のプロセスを考えるのを止めて、知覚から出発することによって経験を構築していく理論である。それ故、極論を言えば、ロッキが想定していた物体や事物という概念装置は不必要となる。そして、この現象主義を極端に押し進めたのがバークリである。

カントの先験的観念論を問題とする上で、パークリの観念説はたしかに重要ではある。しかし、カントの先験的観念論が現象主義かどうか、を検討する際には、パークリの極端な現象主義との関係を問う必要はない。なぜなら、カントの先験的観念論を現象主義と見なす研究者は、パークリの観念説を下敷きにカントを読もうとしたのではなく、むしろ、一九三〇年代から隆盛を誇るより洗練された現象主義を下敷きにカントを読もうとしたからである。それ故、ここではエイヤーとストローソンの現象主義を見てみることにしたい。

エイヤーは『経験的知識の基礎づけ』(“The foundations of empirical knowledge”)という著作でセンスデータ論と呼ばれる現象主義を提起する。この現象主義は、センスデータ、つまり、五感によって獲得される多様な知覚から経験を構築する説である。エイヤーに依れば、センスデータは、多様な知覚であり、私秘的である。そして、これはセンスデータ文によって語られる。センスデータが私秘的である以上、センスデータ文は訂正不可能である。なぜなら、目の前にあるバラが、わたしが誠実である限りにおいて、少なくともわたしにとって赤く見えている以上、そのバラが黄色い、と言うことは事実上、不可能であるから。それでは、物体についての言及はどのように考えるべきか。エイヤーに依れば、センスデータを語る各人間で同一物体について語っていると同意がありさえすれば、物体について語ることができる。それ故、AさんとBさんが、同一のバラについて語っているとすれば、たとえ、AさんとBさんにとってそのバラがどのように知覚されようとも、バラについて言及しうる、ということになる。そして、「このバラは赤い」という物体文は観察や実験によって獲得されるセンスデータによって検証される。物体文は、センスデータによって検証されるものである以上、常に仮説的な性格を持つ。そして、各人間の同意によって物体の性質の確定が行われる。エイヤーの現象主義は、センスデータを産み出す原因については問わず、センスデータそのもの

の物を物の存在を保証するものと見なし、センスデータ相互の整合性(他者によって発話されるセンスデータも含む)によって物体の知識が生成する、と考える説である。

ところで、ストローソンは「意味の限界」という著作の中でカントを次のように評している。「有意味性の原理を支持し、超越的形而上学を結果的に否定して、カントは古典的経験論の伝統、つまり、バークリとヒュームの伝統に極めて近接する。バークリとヒュームの伝統はおそらく、少なくともイギリスにおいてはA・J・エイヤーの著作において最も明晰な近代的表現を受け取った」⁽³⁾。ここですでにストローソンは、バークリ、ヒュームからエイヤーに至る現象主義の系譜にカントの理論哲学が近接していることを、表明している。また、ストローソンは、カントの先験的観念論の特徴を五つにまとめているのだが、その三つ目の特徴を次のように述べている。「物理的世界は知覚を離れては無である。準因果的關係Aの結果として実際に生ずるものは、経験それ自身以外の何ものでもなく、時間的に秩序づけられ、概念的に結合された一連の直観である。被触発項(そして少なくとも部分的には自己触発する項)には形式を与え(yielding)産出する要素の性格があるとすれば、これらの一連の直観は、法則に支配された対象、換言すれば、それらの意識のどのような特定な状態とも関係なく、それ自身の状態や関係を持っている諸対象(空間・時間中にある物体)の知覚であるという性格を持っていることが帰結するのは必然的である。しかし、それらの意識の何らかの状態の生起から独立に自らの状態と関係を持つ空間中にある物体は、実際には存在しないのである。知覚を離れては、物体は実際には無である」⁽⁴⁾。そして、この引用について、ストローソンは次のように述べている。「それ[空間と時間のうちにある事物は物自体ではないという否定(著者引用)]は、むしろ、それらが時間的に秩序づけられたわれわれの表象や知覚から離れて、何らかの現実存在をもつことの否定である。有意味性の原理の使用がこの場合、先

驗的觀念論の何らかの觀點に依拠しているとしたならば、それは物理的世界に関するこの現象主義的觀念論に依拠しているとされる。現象主義的觀念論とは、超感性的實在の信念や、時間系列の経験は超感性的なもの領域における準因果的關係の結果である、というテーゼから全く獨立に、哲學者によつて主張され、企図される學說であり、そうされた學說である⁽⁵⁾。ストローソンは、カントが主張する「空間と時間のうちにある事物は物自体ではない」というテーゼを、空間・時間中にある物体はわれわれの意識の状態に依存的に存在する、と解している。われわれの意識の状態とは、感覚や知覚のことである。それ故、ストローソンのカント解釈においては、われわれが到達しようものは感覚・知覚のみである。そして、物体についての言及は、有意味性の原理によつて、極言すれば、感覚・知覚に名付けられた言語によつてなされる他はない。つまり、ストローソン自身、カントの先驗的觀念論を現象主義的觀念論と呼んでいるように、エイヤーの現象主義と同じものをカントのうちに読みとつているのである。

3

ストローソンがカントの先驗的觀念論を現象主義的觀念論と見なしたのは、カントの先驗的觀念論を「物理的世界は知覚を離れては無である」という說であると考えたからである。たしかにカントは、自らの觀念說について次のように述べている。「わたしはあらゆる現象の先驗的觀念論をわれわれが現象全体をたんなる表象と見なし、物自体そのものと見なさない說と解する」(A396)。「対象がそれ自体に、そして、われわれの感性のあらゆる受容性から切り離されてどのような事情であるにしても、それはわれわれには全く不知である。われわれは対象を知覚するわれわれの仕方以外の何ものも知らなご」(A42/B59)。こうした言葉だけを見る限り

カントは、知覚を離れて物理的な世界が存在しない、と主張しているように取れる。それ故、ストローソンがカントの先験的観念論を現象主義的観念論と呼ぶのも理解できなくもない。しかし、「先験的感性論」を見る限り、必ずしもカントの先験的観念論を現象主義と解するわけにはいかないように思われる。それについて検討するために、「純粹理性批判」「先験的感性論」を見てみることにしたい。

カントは「先験的観念論」の冒頭で次のように述べている。

「ある対象の表象能力への結果は、われわれが対象によって触発される限りににおいて、感覚である。感覚によって関係するような直観は経験的と呼ばれる。経験的直観の未規定の対象は現象である。

わたしは現象において感覚に対応するものを現象の質料と呼び、現象の多様がある関係において秩序づけられることができるようにするものを現象の形式と呼ぶ」(A20/B34)

この箇所はいわゆる触発の問題が古くから論じられた箇所であるが、ここにおいてカントは、現象と感覚と直観の形式について明確に述べている。現象はまず感覚に対応する「現象の質料」とそれを秩序づけている「現象の形式」からなる。現象の形式はここでは語られていないが、「先験的感性論」に依れば「空間・時間」である。

ところで、現象の質料とはどのようなものであろうか。上述の通り、カントに依れば、「感覚に対応するもの」とのみ定義づけられている。「対応」という語は、二つのものの関係を示す語であり、その二つのもの同一ではありえない。従って、「現象の質料」が感覚そのものではなく、感覚とは別であるが、感覚によってその存在が表示されているものであると言いうる。また、感覚は表象である。しかし、現象の質料は感覚とは別物であるのだから、表象ではありえない。なぜなら、表象はそれがどんなものであれ、感覚と知覚という形

を取らざるをえないからである。しかし、感覚と現象の質料の間に因果関係を差し挟むことはできない。なぜなら、そのように考えた途端に、ロックが陥ったような事物の不可知論に陥るし、また、カントは物自体による因果的触発を常に否定しているからである。

そのように考えると、ストロウソンが考えたように、カントは「物理的世界は知覚を離れては無である」という種の極端な観念説を採っていないことになる。しかし、「現象の質料」の導入は未だ曖昧な点が残っているように思われる。なぜなら、「現象の質料」が不可知な対象とされる可能性を孕んでいるからである。それ故、こうした「現象の質料」がどのような存在であるのかを別の観点から説明することにはしたい。そのためには、「現象」がどのような存在であるのかを明らかにする必要がある。『純粹理性批判』『プロレゴメナ』から現象についてカントが語っている箇所を検討することによって、「現象」の概念を明らかにしたい。

『プロレゴメナ』においてカントは、知覚判断と経験判断について語っている。「経験的判断は、それが客観的妥当性を持つ限り、経験判断である。しかし、それがたんに主観的に妥当するにすぎないならば、知覚判断である。知覚判断は、いかなる純粹悟性概念も必要とせず、むしろ、思考する主観における知覚の論理的結合のみを必要とする」(S208, Prol.) つまり、知覚判断とはこのわたしにのみ妥当する判断、カントが挙げている事例を使うならば、「部屋は暖かい」「砂糖は甘い」「ニガヨモギは苦い」いった判断のことである。それでは経験判断とはどのような判断であろうか。「経験判断はつねに感性的直観の表象を越えて、悟性において根源的に産み出される特殊な概念を要求し、その概念は経験判断を客観的に妥当であるようにするのである」(S208, Prol.) ここでカントは、経験判断はたんなる知覚の論理的結合にカテゴリーが付け加わったときに、カテゴリーが判断を客観的に妥当にすることを語っている。そして、ここで言われている客観的妥当性について

カントは次のように語る。「判断が対象と一致するときには、同一の対象についてのあらゆる判断は相互にも一致しなければならず、経験判断の客観的妥当性が意味するのは、その必然的な普遍妥当性に他ならないからである」(S208: Prtl.) カントがここで主張する客観的妥当性とは同一対象についての他者の判断と自己の判断とが一致すること、を意味する。それ故、純粹悟性概念が他者に対しても同一の判断を下すようにさせる、ということが出来る。その場合に、カントは注目すべきことを述べている。「もしも、わたしの判断も他者の判断もすべてそれに関係し、一致しなければならぬような対象、それ故、相互にすべての判断が一致しなければならぬ対象の統一がないとすれば、他者の判断とわたしの判断が一致しなければならぬいかなる根拠もないであろう」(S208: Prtl.) 経験判断を下すとき、われわれは私秘的な知覚を相手にしているのではなく、むしろ、自分が下した判断を他者にも要求しようような公共的な対象を相手にしているということである。公共的な対象、つまり、統一を被った対象が現象であることは言うまでもない。

そのことは『純粹理性批判』からも確認しうる。「ワインの美味は、ワインの客観的規定に帰属しない。そればかりか、現象と見なされた客観の規定に帰属せずに、むしろ、ワインを味わう主観における感官の特殊的性質に帰属する」(A28) 「空間表象は、それが色・音・熱の感覚による視覚・聴覚・触覚といった感官の様式の主観的性質にのみ属している」という点では空間の表象と一致する。しかし、視覚・聴覚・感覚はたんに感覚であつて、直観ではない」(B4) 「われわれは虹を天気雨におけるたんなる現象と呼び、この雨を事象自体と呼ぶが、このことは、われわれが雨を自然科学的にのみ解する限り正しい(中略)この雨粒のみならず、丸い形体、そればかりか、雨粒が降り注ぐ空間すらも自体的なものではなく、感性的直観のたんなる姿容、もしくは基盤に他ならない」(A45, 46/B63) 「物体がたんにわたしの外にあるように見える、あるいは、わたしの魂

はわたしの自己意識においてのみ与えられているように見える、とわたしは言っているのではない」(B70)これらの一群のカントの主張からも、現象とはたんなる主観的感覚の集合体ではなく、主観的感覚を越えた公共性を持った存在であることを再確認しうる。そして、こうしたことから、「感覚に対応するもの」と言われた「現象の質料」が非感覺的なものであり、主観的表象を越えたものであることも理解しうるのである。

それでは感覚と感覚の質料の対応関係をもう少し詳しく見てみることにしたい。それについてカントは次のように述べている。「現象の述語はわれわれの感官との関係において客観そのものに付与されることはできない。例えば、バラに赤色や香りを付与することができる。しかし、仮象は決して述語として対象に付与されることはできない。なぜなら、仮象は感官、もしくは、一般に主観に対する関係においてのみ客観に帰属するものを客観それ自体に付与するからである。例えば、ひとが最初、土星に付与した二つの輪のように。客観それ自体には見出だされないが、つねに客観と主観の関係において見出だされるものである。客観の表象から不可分離であるものが現象である」(B70)ここでカントは現象が表象と不可分離の関係にあることを明確に語っている。そして、現象とは、たんに主観のみの関係でとらえられる対象ではなく、客観の表象(これには感覚も帰属するだろうが)と不可分離な関係にあるものなのである。そのように考えれば、「現象の質料」と感覚との対応関係の内実がどのようなものであるのかは不可知であるとしても、少なくとも、感覚や知覚は現象の質料という存在を捉えるための媒介者にはなっている。しかし、「現象の質料」は知覚の原因と見なされる存在ではない。例えば、カントが挙げている事例で説明するならば、たしかに感覚では土星に二つの輪があるように見える。しかし、実際にはそうでないということもまた知覚によって確認されるのである。その場合には、実際の土星と土星の知覚はまさしく一致しているのであって、原因結果の関係ではない。こうした一連

の事柄がまさしく「つねに客観と主観の関係において見出だされるものであって、客観の表象から不可分離であるもの」が意味することなのである。

4

カントは、感覚や知覚といった主観的表象の他に、現象という表象の対象となりうる対象、換言すれば、表象によってのみ達しうる対象を導入した。そうすることによって、主観と相即的にありながらも、私秘的でない対象を確保した。もしも対象が物自体のようにわれわれにとって不可知なものであるとすれば、われわれは不可避免的に感覚や知覚にしか達することができない。その場合には、われわれは独我論に陥らざるをえず、万人と一致しうるような唯一で確実な経験を持つことなど不可能である。経験科学の成立を望むべくもないことは言うまでもない。それ故に、カントは主観的表象から区別され、しかも、公共的な対象である現象を導入したのである。

現象主義において、われわれが到達しうるのは感覚や知覚からなるセンスデータであり、物体についての言及は他者とのある種の同意によってなされた。現象主義においては他者との同意の根拠を欠いている。しかし、『プロレゴメナ』に依れば、カントの先験的観念論（『プロレゴメナ』ではバークリ等の観念論と混同されるのを避け、「批判的観念論」という言葉でカントは自らの観念論を区別している）においては、現象という公共的对象が万人に一つの判断を要求するのである。つまり、物体についての言及は他者の同意そのものを根拠になされるのではなく、公共的存在である現象が他者の同意を根拠づけているのである。従って、カントの先験的観念論は、すでに現象主義を克服していると断定しうるのである。だとすれば、カントが現象

主義者でありえないことは必然的に帰結しよう。

カントは、『プロレゴメナ』の一節で次のように述べている。「われわれは、経験、および、経験の可能性の普遍的でア・プリオリに与えられた制約とにのみかかわるであろうし、そうしたことにもとづいて、自然をすべての可能的経験の対象としてのみ規定するであろう。わたしは、ひとがわたしの言葉を次のように解するであろう、と考える。すなわち、この場合、わたしはすでに与えられた自然を観察する規則と解してはいない。観察の規則はすでに経験を前提している。従って、いかにしてわれわれは（経験によって）自然から法則を学び取るか、ではない。（中略）そうではなく、経験の可能性のア・プリオリな制約が同時にあらゆる普遍的な自然法則が導出されなければならない源泉であるか、ということである」（S297, Pröl.）。「これまでに述べてきたことをすべて総括して理解するために、読者に次のことを注意しておかなければならない。ここでは経験の生成が問題ではなく、むしろ、経験のうちにあるものが問題である、ということである。前者は経験的心理学に帰属し、その場合、認識の批判、とりわけ、悟性の批判に帰属する後者がなければ、それ自体、決して十分に展開されることはできないであろう」（Pröl. S304）これらの発言は、カントの先験的観念論の問題構成が経験が感覚や知覚からどのように生成、洗練されていくか、というものではなく、むしろ、経験の存立の制約を問うものであることを意味する。そして、これまで述べてきたことから、現象主義の問題構成が生成論のコンテキストにあることは言うまでもない。それ故、ストローソンはカントの批判哲学の根本的立場を誤読し、カントの先験的観念論を生成論のコンテキストから読んだために、カントを現象主義者と見なすにいたったのである。

最後にもう一度、「カントは現象主義者ではない」。

【註】

カントの著作からの引用はアカデミー版に依り、本文中に略記号で表示している。『純粹理性批判』については、第一版をA、第二版をBで表示し、アラビア数字でページ数を表示している。また、『プロレゴメナ』については、'Pro.'と表示し、アラビア数字でページ数を表示している。

- (1) cf., H.E. Allison: Kant's Concept of the Transcendental object, Kant-Studen 59, 1968, p.171
 - (2) *ibid.*, p.185
 - (3) P.F. Strawson, The Bounds of Sense, 1966, reprinted 1993, p.18
 - (4) *ibid.*, p.237
 - (5) *ibid.*, p.242
 - (6) 「表象 (Vorstellung)」という語は、カントにおいては「表象すること」の意と「表象されたもの」の意で用いられている。それ故、どちらの意味でこの語が使用されているかはコンテキストに応じて区別する必要がある。「現象が表象にはかならない」と言われるときの、表象は後者であり、現象は表象の対象である。黒横俊夫『カント解釈の問題』p.44、久呉高之「カントにおける現象の観念性―表象としての現象―」(『批判的形而上学とは何か』「カント研究会」見洋書房 1997) p.16、参照。
- 【参考文献】
- (1) Allison, H.E., 1968: Kant's Concept of the Transcendental object, Kant-Studien 59.

- (2) Ayer, A.J., 1969: *The foundations of empirical knowledge*. St. Martin's Press.
- (3) 久呉高之 一九九七: 「カントにおける現象の観念性―表象としての現象―」 『批判的形而上学とは何か』 晃洋書房 pp.6-40
- (4) 黒積俊夫二〇〇〇: 『カント解釈の問題』 溪水社
- (5) 田村 均 一九八二: 「現象主義の検討」 『哲学論叢』 第9号 (京都大学哲学論叢刊行会編) pp.73-84
- (6) Strawson, P.F. 1966: *The Bounds of Sense. An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*. reprinted 1993.